

道徳の授業に関する Q&A 「授業の評価はどのようにすればいいのですか」

今日の授業で、児童生徒は何を考え、どのような変容を見せたのでしょうか。このことを把握すること、つまり授業の評価を行うことは、次にどんな授業を仕組んでいくのかを準備することです。ではどのような観点で評価すればよいのでしょうか。

まずねらいを振り返ります。そもそも授業のねらいは、目の前の子供たちに対して妥当だったのでしょうか。ねらいを実現するために資料を選択します。その資料でよかったのでしょうか。「ねらいは子供の実態に対して高めだったが、資料に救われた」「よい資料だったが扱い方を誤って、ねらいとずれた議論が多かった」そんなこともあります。どれくらい子供のことを知っていたのか、伸ばそうとした方向と実現のために選択した資料は妥当だったか、の検証です。

次に授業の流れ、指導過程を評価します。授業の構成は子供の思考の流れにあったのでしょうか。発問は的確だったのでしょうか。他の授業や行事、体験学習の成果を盛り込めるものだったのでしょうか。たった一時間の授業ですが、関連する事前の指導はあったのでしょうか。授業後に学んだことを実生活にまで橋渡しするような指導や帰りの会での説話は準備されていたのでしょうか。

三つ目は指導の方法や工夫です。ねらいを実現できる方法、様々な個性をもった子供たちが、集中して意欲的に学べる工夫、子供たちの発達段階にあった方法、そのようなものがこの授業にあったかを振り返ります。例えば中学生であっても心を込めた、役になりきった資料の範読に揺さぶられます。どう音読するか、つまりどの登場人物の、どの発言に注目させるか、事前の練習は十分だったかと振り返ってみましょう。

四つ目に自らの教師としてのあり方です。授業外も含めて、足りないところを冷たい言葉で指摘するだけで終わっていなかったのでしょうか。同じ人間として、共に悩もう、学び合うことを楽しもう、感動を分かち合おう、そんな姿勢をもって授業を展開できたのでしょうか。

これら四つの観点での授業評価を可能とする方法には次のようなものがあります。

まずは観察です。授業中やその前後での子供の発言や様子を見取りましょう。挙手・発表があればよいか、と言えばそれだけでもありません。真剣に考えている姿も授業での大切な反応です。次にワークシートへの記述です。全員にコメントを書くことは、個々の学びや成長を把握・促進する大切な作業です。また他教師に授業を見てもらうのも有効です。録音・録画はできるだけ多くの教師で確認すると効果絶大です。

道徳の授業の特徴として、教えた側が教えたと考えている内容と教えられた側が学んだこととの「ずれ」があります。教科化もありこの点の研究が進むでしょう。教育課程が終了した時に子供の中に残されたものをカリキュラムと呼ぶのであれば、授業評価は個と集団それぞれに必要でしょう。